

基調講演

佐倉城跡（歴博第13次）の発掘調査について

主任調査研究員 大村冬樹

1. 佐倉城跡の発掘

令和3年に発掘した「佐倉城跡（歴博第13次）」は、現在の国立歴史民俗博物館の駐車場内にあたる（第1図）。

佐倉城跡は昭和40年代以降、博物館の建設やそれに関連する事業が行われるたび、何度も発掘調査がされてきた。歴博ではこれまで第13次まで調査が実施され、第1・2・4次調査では城の空堀、第3次調査では武家屋敷、第7次調査では古墳時代前期から奈良・平安時代の竪穴住居跡などの遺構が検出された。このことから、古墳時代以降、この台地上に一定の集落が存在した可能性が考えられる。今回の発掘調査は令和3年3月から約4か月実施された。

2. 近世大型土坑

全長は20m以上、深さ約2mの巨大なもので、西の台地縁辺部には細長いスロープが造られている（第2図）。土坑の中からは深さ約1.7mの部分で火山灰が採取され、1707年に噴出した宝永火山灰と判明した。このことから、この土坑は18世紀初頭、1707年には開口していた可能性が高い。

この土坑は当初、土を採取するために掘られ、18世紀末頃になって廃棄土坑として使われたとみられる。このような事例は江戸時代の市中ではよくみられるもので、当初は土砂の採取が目的だったのではないかと考えられる。

3. 近代建物跡

建物の輪郭に沿って基礎の石が直線的に検出された。また、1号建物のほか2号建物、3号建物と複数の建物の基礎が重なりあっている状況が判

明した（第3図）。

基礎の最上部から出土した建物の周囲から出土した小型 端反碗（はざりわん）（第10図）と薄手の平形碗（第9図）から、建設された時代は大正時代以降の可能性が高い。また、基礎のモルタルは大正時代から昭和20年代にかけて生産されていたものであり、本遺構は大正時代から昭和20年以前のものと考えられる。

1号建物跡の基礎石に使用された石材の種類は様々であることが判明した（第4図）。花崗岩や緑色凝灰岩などの石が使われ、なかでも安山岩が多くみられる。この他、伊豆半島や箱根付近から産出した石材をはじめ、複数の種類の石が使用されていたことがわかった。

また、石の形は球形や立方体など、自然石ではなく加工したものが多い。文字が掘ってあり、墓石を転用したものもみられる。なかには石自体が直方体ではなくやや丸い形をしており、僧侶専用の墓石もある（第11図）。表面には梵字と、「天和癸亥三年 當寺第二世權大僧都法印觀海不二位孟秋上六日」と刻まれており、この僧侶が亡くなったのは天和3年（1683年）の初秋という事が読み取れる。このような墓石は、連隊の建物を建設する際に周辺の寺から集めて転用したものと考えられる。

さらに、妖怪石と彫ってある基礎石（第12図）もみられた。妖怪という意味には、「わざわいを招きそうな不吉なさま、危険」といったものもあり、この石は神社などに奉納されていた力石とみられ、わざわいを回避するために「妖怪石」と記した可能性が考えられる。また、中央に百メ目と彫られ

ているが、実際の重さは 188 kg だった。

また、基礎石を重機で除去したところ、一部に木の杭が検出された(第 5 図)。杭の長さは約 2 m もあり、地盤の弱い箇所のみを狙って打設していたことが判明した。

4. 出土遺物

近世の出土遺物の中で最も変わっていて注目されたのは棟端瓦である(第 6 図)。その特徴は大きな目と鼻、顔面中央の角、両隣には円形の剥離痕がいくつみられ、額には波打つ皺が表現されている。右の口元には剥離した跡があり、髪があつたのではないかと推定される。

遺物の中で最も多いのは陶磁器類で、磁器の碗類は広東碗・端反碗など 17 世紀中葉から 19 世紀代に至るまでの器種が多数出土した(第 8 図)。そのなかでも 18 世紀後葉(1770 年代)に比定される小広東碗が多く出土した。皿の出土量は少ないが、18 世紀代の製品が大半を占めている(第 7 図)。

陶器は肥前系や丹波・堺系など各地のものが見られ、磁器と同様に 17~19 世紀代の遺物群が出土し、徳利・灯明皿・擂鉢がやや多くみられる。

近代の瓦としては、ジェラール瓦と呼ばれる横浜で製造された瓦が出土した(第 13 図)。形態から、1873 年から 1876 年の間に作られたものと判明した。

他には瓦や鉄製品、さらに金箔も認められる。ほとんどのものは炭化物や焼土と一緒に出土し、同時に土坑に投棄されたものとみられる。

5. まとめ

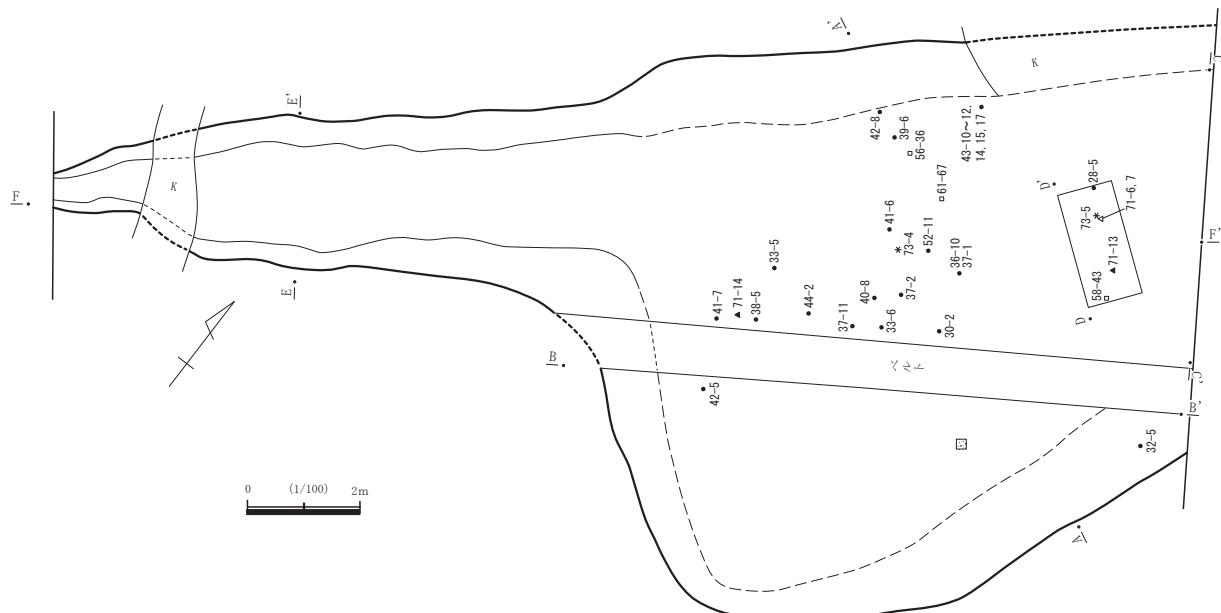
今回の調査から、近世の大型土坑という珍しい遺構が明らかになった。また、近代建物の配置から、国立歴史民俗博物館駐車場の未調査の地点には佐倉連隊の建物が複数存在するものとみられる。

今後、さらに発掘調査が進むことで他の連隊建物についても明らかになることが期待される。特に、木杭が検出された範囲についてはまだ駐車場東側の部分の範囲が不明であるが、1 号建物の全

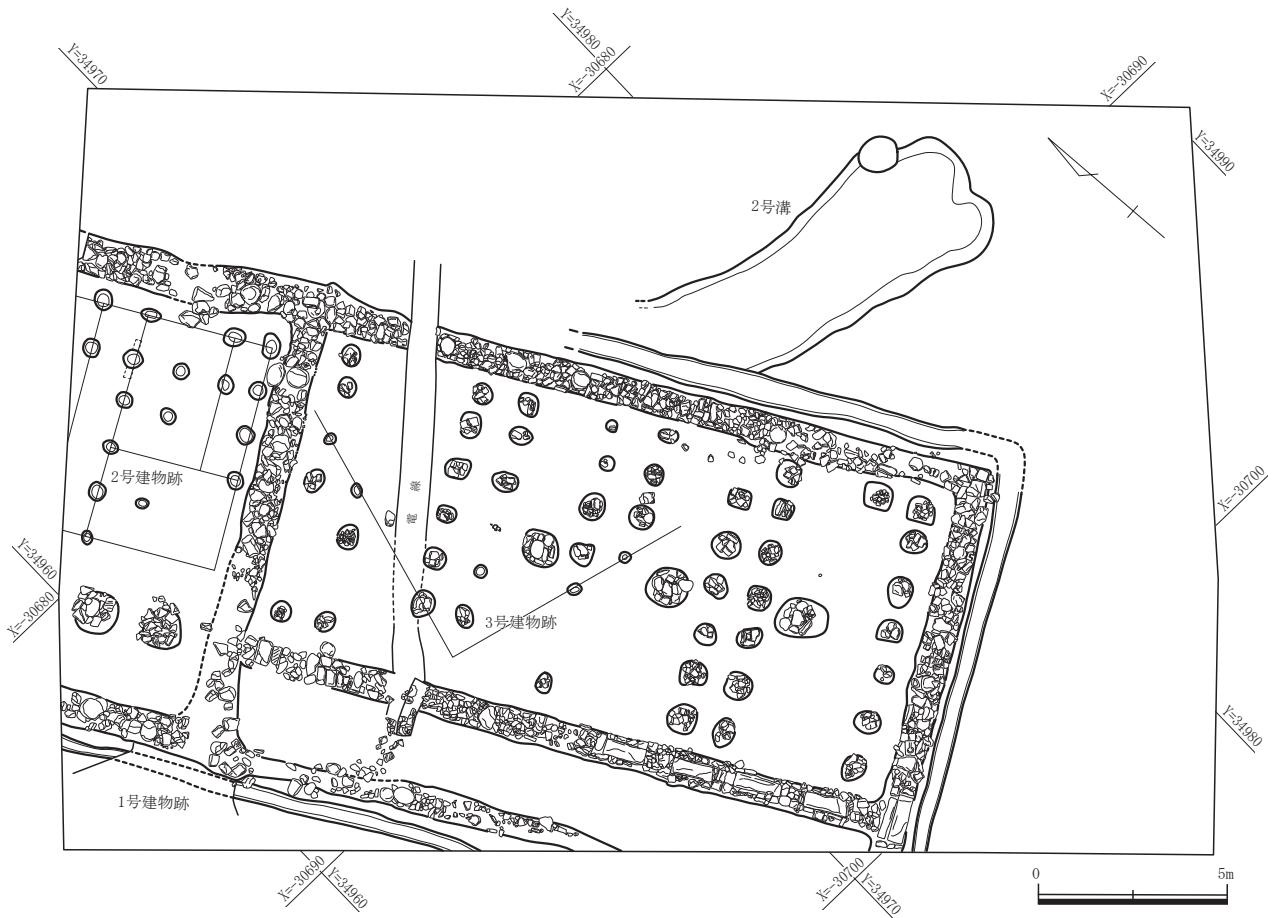
体像と軟弱地盤の補強工事について知る上で重要なとみられる。



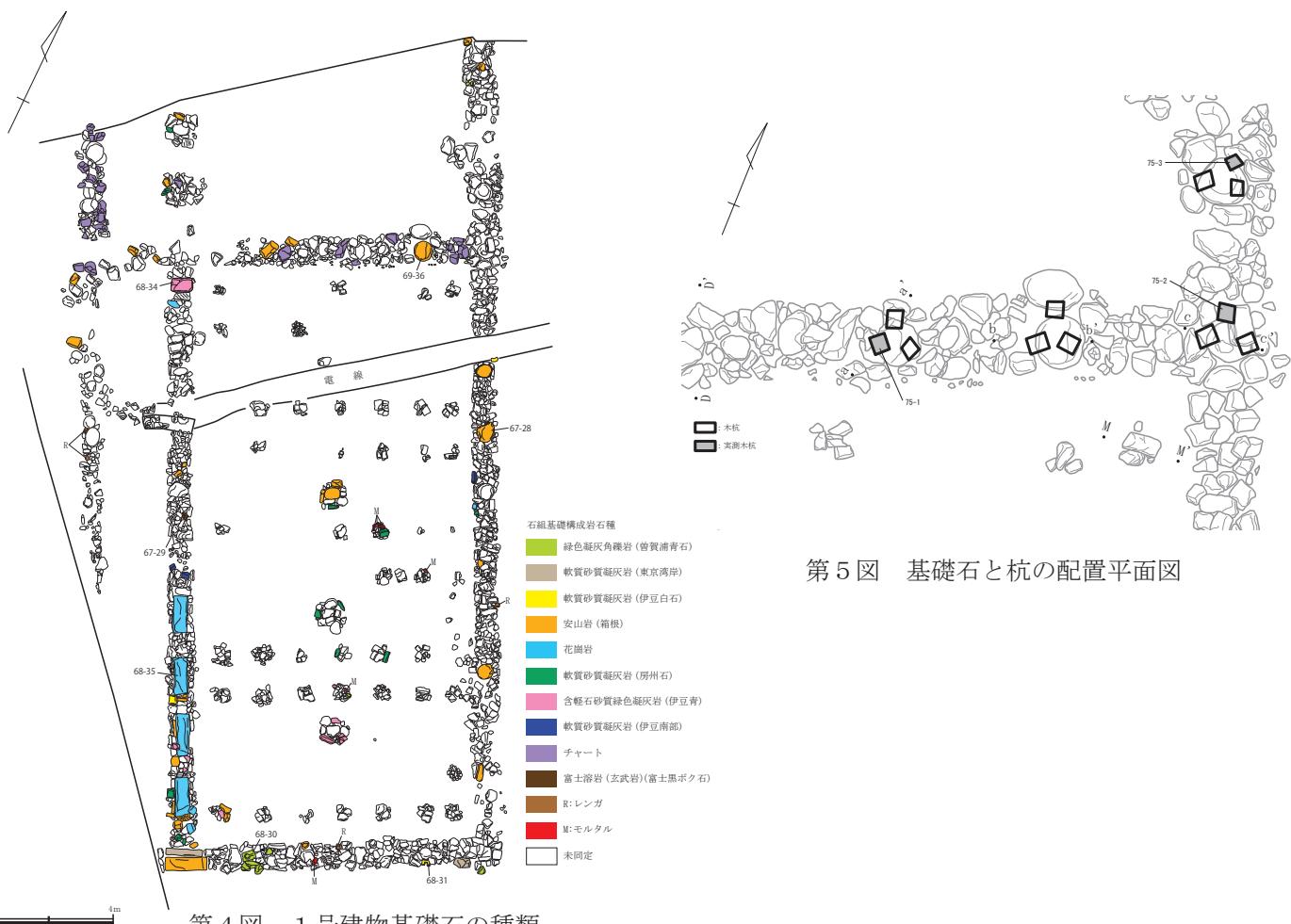
第1図 佐倉城跡（歴博第13次）調査地点



第2図 近世大型土坑検出状況

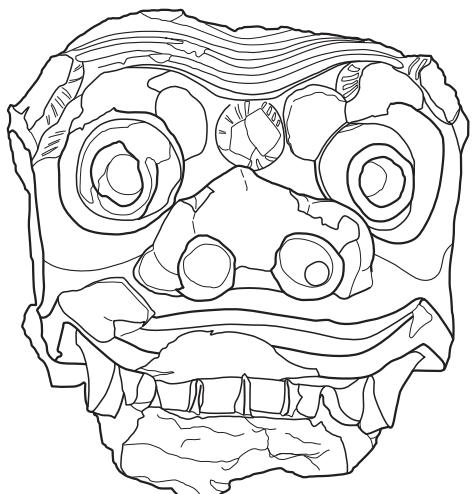


第3図 近代面建物検出状況



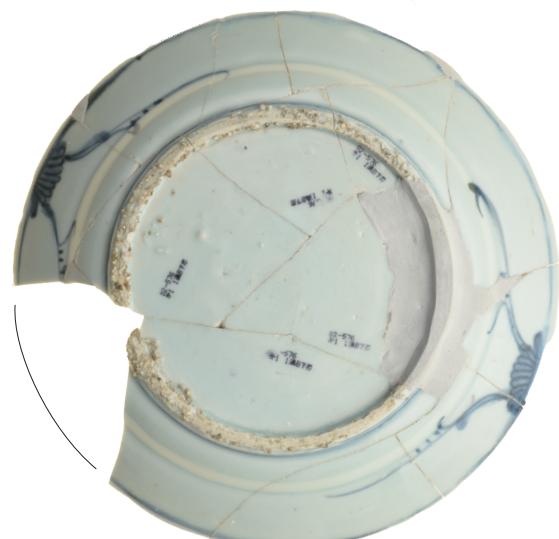
第4図 1号建物基礎石の種類

第5図 基礎石と杭の配置平面図

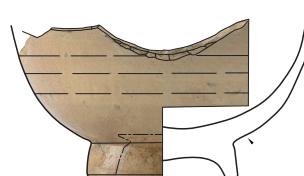
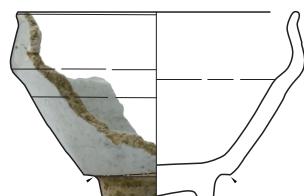


0 10cm

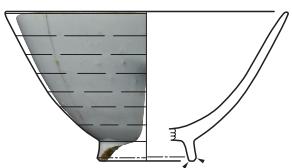
第6図 棟端瓦



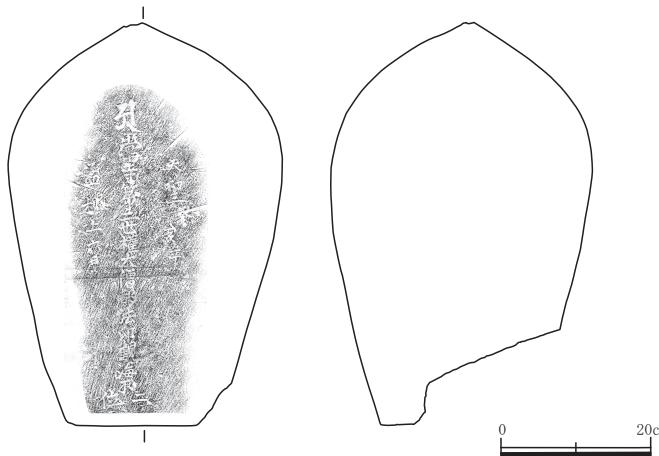
第7図 1号土坑出土皿（中国産）



第8図 1号土坑出土碗（17世紀）
上：瀬戸・美濃系 下：肥前系



第9図 1号建物出土平形碗

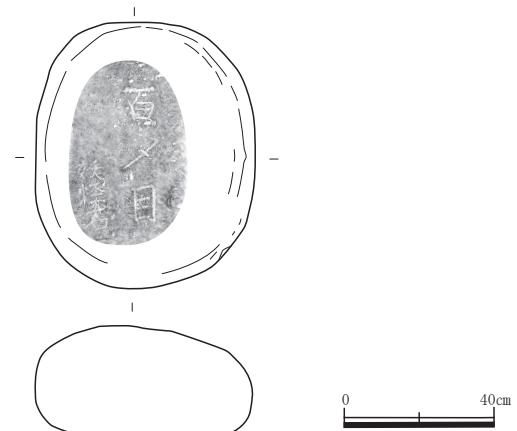


第11図 僧侶墓石

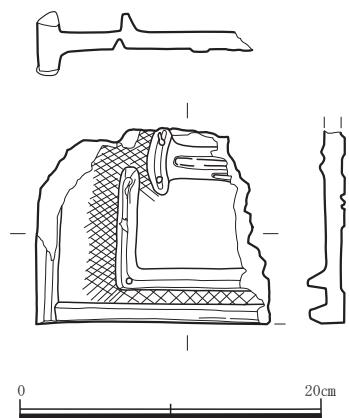
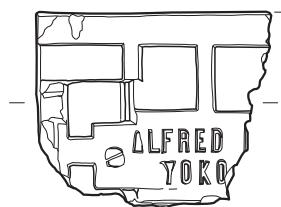


第10図 1号建物出土端反碗

0 10cm



第12図 力石（妖怪石）



第13図 ジェラール瓦